

も
へ
じ

令和七年度足立区登録文化財…P1 「伊古宇」の尼僧…P3
収蔵資料展…P4 博物館40周年のロゴマークができました…P4

足立史談

第698号

2026年4月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



【1】高橋廣湖「春秋野径図屏風」

はい、文化財係です
令和七年度足立区登録文化財
新たな登録文化財が決まりました



足立区文化財保護審議会の答申を受け、足立区教育委員会は令和八年三月十一日に表の通り新たな文化財を告示しました。今回は、これらの文化財について簡単に紹介いたします。

名倉和子氏旧蔵 郷土博物館所蔵
(参考) 「足立史談」五九七号
平成二十九年企画展図録『高橋廣湖・千住に愛された日本画家』

【1】高橋廣湖「春秋野径図屏風」 登録有形文化財（絵画）

高橋廣湖（たかはしこうこ・一八七五～一九一三）は、岡倉天心にも実力を高く評価された画家です。経緯は不明ですが、千住の人々が廣湖を支援する「芳廣会」（ほうこうかい）を組織しており、千住の人々にあつく支持されました。本作は千住に伝来しており、そうした背景を物語っています。

本作は、早春の田舎道を供の小僧を連れて歩く女性たちの図（右扇）と、農家の前を帰る母子の図（左扇）が描かれており、女性を中心に据えた情景が精緻に描き込まれた良作です。

【2】清水圭明「四季花鳥図屏風」 登録有形文化財（絵画）

江戸時代後期から、千住橋戸町を拠点に活動した清水圭明（しみずけいめい・一八〇一～没年未詳）による六曲一双押絵貼屏風。

本作は、濃密な色彩と描写による四季の花鳥図で、琳派の酒井抱一が創始した十二カ月を一図ずつ描く様式を用いています。キジやウズラ、ホトトギスなどが美しく描かれています。

千住河原町 中島家旧蔵
郷土博物館所蔵

【3】村越其栄「天神図」 登録有形文化財（絵画）

村越其栄（むらこしきえい）は、



【2】村越其栄「天神図」

息子の向栄(こうえい)と共に千住で家塾を営みながら絵師としても活動しており、令和六年度には、其栄の作品が一点、向栄の作品が三点、文化財登録されています。

本作は、嘉永五年(一八五二)の作品で、菅原道真を描いたものです。(写真参照) 左上の黒く長方形に見える部分には、道真筆とされる経文が写されています。道真像は、色の濃淡によって立体感が描出され、江戸琳派の鈴木其一(きいつ)に学んだ其栄の高い技術力をうかがえます。

千住河原町 中島家旧蔵
郷土博物館所蔵

【4】木造不動明王及び二童子立像 付、胎内文書

登録有形文化財(彫刻)

常善院(大谷田一丁目三十三・十五)に伝来した仏像です。中央に不動明王、左に矜羯羅童子(こんがらどうじ)、右に制吒迦童子(せいたかどうじ)を配しています。

近年行われた修理の際、仏像の中から古文書が発見され、万治二年(一六五九)に制作されたものであることが判明しました。「羽黒山大仏師慶存」と仏師の名も刻まれています。不動明王の大きな頭部と丸い目の表現は素朴で親しみやすい作風です。

*通常は非公開です。

令和7年度 新規登録文化財(令和8年3月11日付教育委員会告示)

| NO | 名称 | 種別 |
|----|---|---------------|
| 1 | 高橋廣湖「春秋野径図屏風」 たかはしこうこ「しゅんじゅうやけいずびようぶ」 | 登録有形文化財(絵画) |
| 2 | 清水圭明「四季花鳥図屏風」 しみずけいめい「しきかちょうずびようぶ」 | 登録有形文化財(絵画) |
| 3 | 村越其栄「天神図」 むらこしきえい「てんじんず」 | 登録有形文化財(絵画) |
| 4 | 木造不動明王及び二童子立像 付、胎内文書 もくぞうふどうみょうおうちゅうぞうおよびにどうじりゅうぞう つけたり、たいないもんじよ | 登録有形文化財(彫刻) |
| 5 | 煉瓦造山王社 れんがぞうさんのうしや | 登録有形文化財(歴史資料) |
| 6 | 南北消防記念碑 付、木遣り歌碑 なんぼくしょうぼうきねんひ つけたり、きやりかひ | 登録有形文化財(歴史資料) |
| 7 | 森鷗外旧居 橘井堂跡 もりおうがいきゆうきよ きつせいどうあと | 登録記念物(史跡) |

【5】煉瓦造山王社

登録有形文化財(歴史資料)

加賀町会館敷地内(加賀二丁目六・五)にある煉瓦造のほこらです。明治く大正時代にかけて、足立区は煉瓦の一大生産地でした。煉瓦造のほこらはそうした地域の歴史を反映しています。

基礎部の煉瓦は、長手と小口を交互に並べるイギリス積み、室部の煉瓦は、長手を連続する長手積みとな

っており、焼成の色合いが異なる点などから時期の異なる煉瓦を用いていると考えられます。現在もお供え物やお祭りなどが行われており、地元で大切にされています。

【6】南北消防記念碑

付、木遣り歌碑

登録有形文化財(歴史資料)

大正十二年四月に慈眼寺(千住一丁目二・九)に建碑された記念碑です。安政元年(一八五五)に発足し

た上組・中組・下組の三組で構成される南北千住消防組に属した歴代人々の名が記されています。一部に殉職者の名前も記されており、慰霊碑の意味も合わせ持っています。

木遣り歌碑は、南北消防記念碑の建碑を記念して同時に制作されたもので、石材一式を奉納した石山金五郎の木遣り歌が刻み込まれています。(参考) 『足立史談』六九二・六九七号



【7】森鷗外旧居 橋井堂跡

登録された文化財は、関係者の皆様のご尽力により保存されてきたものばかりです。区としても大切にしていまいます。

現在、鷗外の住んだ建物など当時の痕跡は残されていませんが、千住と森鷗外の深いつながりを示す場所です。

あつた鷗外も明治十四年七月から当地に住み、医療活動に従事しました。ドイツ留学期間を除き、明治二十二年に引越すまで鷗外は千住に居住しました。

千住一丁目にあるカノン千住の東側、駐車場出入口付近は、文豪森鷗

登録記念物(史跡)

外の旧居跡です。(千住一丁目三十



【4】木造不動明王及び二童子立像付、胎内文書

「伊古宇」の尼僧

関口 崇史

時宗の総本山清浄光寺(別名遊行寺で知られる。神奈川県藤沢市)が所蔵する国の重要文化財『時衆過去帳』には、伊興の尼僧に関する記述がみられる。同記事はすでに金井清光氏によって紹介されている(『時衆教団の地方展開』参照)。同氏は

中世武蔵国内における時宗教団の動向に関する史料として取り上げたが、本稿では史料の少ない中世伊興の史料として、同地域の時宗の信仰の広まりについて考察したい。

■『時衆過去帳』今回取り上げる

『時衆過去帳』(以降、「過去帳」と表記)は、『応其過去帳』(おうごのかこちよう)とも呼ばれ、折本(おりほん)で僧衆・尼衆の部の二冊からなる過去帳である。弘安二年(一二七九)、二代遊行上人他阿真教(たあしんぎょう)から永禄六年(一五六三)、三十代遊行上人他阿有三(たあゆうぞう)まで書き継がれた。遊行上人は遊行する際、携行し、遊行先で往生人の名を同過去帳に記したのである。

*遊行(ゆぎょう)：修行者が諸方に遊歴し説法行化すること、遊方

行化を意味する宗教的行為を前提とするものであるから、物見遊山を目

的とする旅行とは本質的に異なり、修行的要素が加わっている。(中略)一般的には一遍智真、およびその流れを汲む時衆聖の諸国行化を指している(大橋俊雄『国史大事典』)。

*遊行上人(ゆぎょうしやうにん)

：一遍の死後、念仏の道場が各地に建てられると、そこに止住する僧もあらわれて、時宗の教団が形成されるようになったが、いくつにも分派した時宗の中心となった遊行派は、相模藤沢の清浄光寺を拠点として発展した。時宗の指導者は遊行上人と呼ばれ、生ける仏として崇敬され、多くの信徒を率いて回国巡行を続けたが、晩年に遊行を続けることが困難になると、清浄光寺に引退した。寺に住むようになった上人は、藤沢上人と呼ばれたが、鎌倉時代末以降、藤沢上人が没すると、回国中の遊行上人はその地位を後継者に譲って清浄光寺に入り、藤沢上人をつぐのが時宗の慣例となった(大隅和雄『世界大百科事典』)。

■「伊古宇」の尼僧 過去帳における伊興の記述は、十代遊行上人元愚(がんぐ)の代の尼集の部に次の通り、記されている。

(応安七年) (裏書)

同 五月十六日 「伊古宇」

尊一房

応安七年(一三七四)五月十六日、「伊古宇」において尊一房なる尼僧が往生を遂げた記述である。中世において伊興は「伊古宇」と表記されていた。

■十代遊行上人元愚 元愚は正中二年(一三二五)生まれ、加賀出身の僧侶である。十九歳の時、七代遊行上人託何(たぐが)の弟子となり、貞治六年(一三六七)六月十八日、九代遊行上人白木(はくぼく)が駿河国府中長福寺(現静岡県静岡市

長善寺)において没すると、同年七月七日、清浄光寺において遊行を継承した。元愚の遊行期間は十五年に及んだ。康暦三年(一三八一)二月十八日、尾道常称寺(現広島県尾道市)にて自空に遊行を継承させた。

その後、元愚は清浄光寺に帰住し、至徳四年(一三八七)正月十一日に没した(高野『時宗教団史』参照)。元愚は応安七年(一三七四)五月五日、六浦(現神奈川県横浜市)、同十六日、伊興、そして、同年六月三日には越後に移っている。

■遊行上人と武蔵国 遊行上人が全国を廻ったのは開祖一遍のみであった。二代他阿真教以降、時宗に帰依した在地武士をはじめとする有力者は各地に時宗道場を建設し、道場に止住する僧侶の派遣を要請した。

要請を受け、各地に僧侶を派遣した結果、時宗は教団化していくのである(石田『一遍と時宗』参照)。

金井氏は遊行上人による武蔵国内の順路について、鎌倉(戸塚(神奈川県横浜市))、町田(東京都)、府中(久米(埼玉県所沢市))から河越(埼玉県川越市)に入るルートと相模原(神奈川県)、八王子(東京都)、昭島(福生(入間(埼玉県)))から河越に入る二つの順路を提示している(金井氏前掲書)。

■伊興と時宗 伊興地域における時宗については加増啓二氏による研究がある。同氏は天台宗であった伊興現寺が他阿真教により時宗寺院となった伝承を有し、区内に現存する中世後期の時宗系板碑群(註一)が伊興に集中していることから、従来、所在地不明の「白幡道場」(註二)が応現寺の前身であった可能性を指摘し、伊興を中心とする時宗の広まりを指摘している(『東京北東地域の中世的空間』参照)。

また、応現寺末寺花畑東善寺の康安元年(一三六一)十二月十四日銘「名号板碑」は元愚来訪以前から伊興地域における時宗の存在を示している。元愚の遊行時代である応安元年(一三六八)、武蔵平一揆により河越直重が敗北している。河越氏は武蔵における重要な拠点河越の有力な外護者であった。元愚が六浦(応安七年五月五日、現横浜市)から伊興(同月十六日)へ入ったのも武蔵平

一揆による河越氏の没落が武蔵国内の布教活動に少なからず影響を与えたのではないだろうか。そこで、すでに時宗の信仰が広まっていた伊興を遊行先に選んだものと思われる。元愚による伊興への遊行は同地域における時宗のさらなる発展をもたらしたのではないだろうか。

(註一)時宗系板碑：碑面の中心に「南無阿弥陀仏」(名号)をすえたり、人名に、○阿弥や、○房といった時宗の信仰に関連深い表現を使用した板碑。足立区は、伊興に集中して存在している。

(註二)白幡道場：二代遊行上人他阿真教の詠歌集『二祖上人詠歌』に記述されている道場で、歳末別時念仏という修行を行ったとされるが、所在地については確定していない。

【参考文献】大橋俊雄『時衆史料第一 時衆過去帳』教学研究所、一九六四年)金井清光『時衆教団の地方展開』(東京美術、一九八三年)石田善人『一遍と時衆』(法蔵館、一九九六年)塚田博「時宗と板碑」(『特別展 あいしもの文化財でたどる室町・戦国時代・荒川下流域の結衆板碑』足立区立郷土博物館、一九九八年)高野修『時宗教団史・時衆の歴史と文化』(岩田書院、二〇〇三年)

収蔵資料展

4月29日～8月30日

郷土博物館に集められた魅力的な地域の宝をくらんでください。



加増啓二『東京北東地域の中世的空間』(岩田書院、二〇一五年) (足立区文化財調査員)

博物館40周年のロゴマークができました



郷土博物館は一九八六年(昭和六十)十一月三日に開館しました。今年、開館四〇周年を迎えます。